平成27年度　修士論文

第2次社会化としての手帳：中国人の日本社会への適応に関する社会学的一考察

2016年2月

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科
経済社会システム専攻

袁　青琳

目次

はじめに　本論の目的と構成 1

第1章　中国人留学生にとっての二つの「壁」：日本語と日本文化..... 3
　第1節　中国人の留学先ランキング 3
　第2節　第一の壁：日本語（英語との比較） 7
　第3節　第二の壁：日本文化 9
　小括 11

第2章　第2次社会化論としての準拠集団論 12
　第1節　社会化のバリエーション 12
　第2節　第2次的社会化論としての準拠集団論 13
　第3節　準拠集団論のバリエーションと「パースペクティブとしての準拠集団」.... 16
　第4節　パースペクティブとしての準拠集団論からみた中国文化と日本文化..... 20
　第5節　準拠集団論からみた日本文化としての「時間厳守」 23
　小括 25

第3章　中国人による手帳の活用実態：調査結果の分析を基に..... 27
　第1節　「手帳」：その一般的な使われ方 27
　第2節　調査の概況 30
　第3節　調査対象者の属性 30
　第4節　手帳の使用状況の概況 33
　第5節　「手帳」：中国人による活用例 34
　第6節　手帳の利用類型―4象限による分析..... 45
　小括 53

第4章　手帳：日本社会への適応と現代大衆社会への適応 57
　第1節　準拠集団としての日本社会と準拠集団としての手帳 57
　第2節　第四世代の手帳 59
　第3節　課題と展望 60

【引用文献】 61

平成27年度　修士論文要旨

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科経済社会システム専攻

（題目）第2次社会化としての手帳：中国人の日本社会への適応に関する社会学的一考察

（氏名）袁　青琳

本論文の目的は、中国人の日本社会への適応のあり方を解明することにある。この問題を解明するに際して、中国人留学生の日本への適応という問題を取り上げる。特に、彼らの「手帳」の使い方に着目する。上記のことを明らかにするために、鹿児島にいる（いた）留学生及び元留学生の22名にインタビュー調査を行った。

シンボリック相互作用論の社会化論は、人間を主体的な存在と捉える発想をその根底に持っている。人間はある特定の環境（社会）に適応しようとする。その際に、その環境（社会）からある一定のパースペクティブを獲得する。その環境（社会）がその行為者にとっての準拠集団となる。準拠集団から獲得したパースペクティブを通して、その環境（社会）に存在する他者たちと社会的相互作用を行い、同時に自分自身とも相互作用を行う。行為者はこの二つの相互作用のなかで、その適応を達成しようとする存在である。

本論文では、シンボリック相互作用論による社会化論に依拠して論を展開する。調査対象者による手帳の使い方を整理し、カテゴリー分類を行った結果を、「内的―外的・道具的―表出的」という四象限に適用した。さらに、各象限の使い方が調査対象者に与えた変化を整理した。その結果、「手帳」は、「外的」な機能以外に、「内的」な機能も担っていることが明らかとなった。「外的」機能において、調査対象者は日本社会（にいる日本人）を準拠集団とし、日本社会への適応を促進していく。「内的」機能において、調査対象者は手帳（に書き込んだこと）それ自体を準拠集団とするによって、パーソナリティの変化を遂げていく。また、現代日本社会において、手帳は単なる「道具的」な意味を超え、「表出的」な色彩も帯びていることも分かった。多元化・多様化した現代大衆社会において、人間の自我の獲得が難しくなってきている。多様なパースペクティブを内面化することにより、時に葛藤を経験してしまう。このような現代大衆社会において、自我の外化（表出）の必要性が必然的に生じる。手帳の「表出的」機能において、個人は安定性を持った自我を獲得することができる。上記の結果を踏まえると、中国人の日本社会への適応を促進する道具として「手帳」が捉えられる。また、リスクを伴う現代大衆社会において、自我の安定性や自分探しの道具として「手帳」を捉えることができる。

はじめに　本論の目的と構成

中国人にとっても日本人にとっても、お互いに相手（社会）は円滑な交流（相互適応）を行うことが必要不可欠な存在である。本研究は、中国人の日本社会への適応のあり方を解明することにある。上記の問題を解明するに際して、中国人留学生の日本への適応という問題を取り上げる。

この問題について、岡益巳、深田博己、周玉慧は「中国人私費留学生の留学目的及び適応」という論文の中で、以下のような考察を行っている。

「異文化適応」という問題を取り上げる際には、それを個人と異文化環境との調和的関係の確立として静的に捉える立場と、個人が異文化環境に順応していく過程として動的に捉える立場がある。動的に捉える立場は、個人が環境の変化のどの側面にどの程度順応できるか、また、どのような経過をたどって達成できるのかが問題とされる。異文化適応問題、中でも外国人留学生の異文化適応は重層的である。そこには、人間の成長発達段階の適応、学生としての環境への適応、異文化レベルの適応という三つのレベルがある。そして、異文化適応は、時間の経過に従って特徴的な変化を示す。外国人留学生の適応尺度は学習・研究、心身健康・情緒、言語、対人関係、文化、住居・自然環境、経済環境の七つの領域から捉えられる。適応を阻害する要因の中でも、日本人とのコミュニケーション、外国人に対する日本人の態度、日本人の考え方といった日本人との人間関係という要因が、外国人留学生に強く認識されている。しかし、岡らによれば、外国人留学生の日本への適応に関する上記の七領域、特に対人関係領域での適応の結果は必ずしも一貫していないという。さらに、適応の問題に関して、留学目的の重視度と達成満足度が密接に関わっているという結果がある。また中国人の私費留学生の適応は経済的要因に影響されているという特殊性があることも実証されている。

以上のようにこの問題に関する先行研究を整理し，検討した上で、その知見を踏まえ、岡らは中国人私費留学生を対象とした調査を行い、彼らの留学目的重視度、留学目的達成満足度、適応度に関する各領域間の差異を検討し、留学目的の重視度、達成満足度、適応に及ぼす人口学的変数の影響を検討した。その結果、①中国人私費留学生が重視する留学目的の領域は、勉学領域と言語領域であることが判明した。留学目的達成満足度は、他の領域に比べ交流領域でもっとも低いことが明らかとなった。適応度は、勉学領域と環境領域の方が交流領域と情緒領域よりも優れて高い。留学目的達成満足度と適応とは、正の相関関係で積極的関係している。②中国人私費留学生の留学目的重視度に対し、有意な関係を示した人口学的変数に、日本語能力があり、日本語能力の上級者ほど、全体的に、勉学と言語領域の目的をより重視している。③経済的側面に関係する人口学的変数として、総収入と授業料減免が部分的な影響を及ぼしている。総収入の少ない者が文化体験領域の目的をより重視し、授業料の減免を受けている者の方が交流領域の目的を重視している。④留学目的達成満足度に対し有意な関係を示した人口学的変数に、来日後の滞在期間がある。

滞在が中程度の者の方が満足度は大きい。満足度が小さいのは、交流領域では滞在期間の短い者、言語領域では長い者である。⑤中国人私費留学生の適応に対して有意な関係を示した人口学的変数に、総収入と在籍身分が、次いで住居の影響がある。総収入の中程度の者の全体的適応度が最も低く、総収入の少ない者の方が交流領域での適応度が高く、総収入の多い方が情緒領域での適応度が高い。住居変数の場合、アパート居住者の方が交流領域での適応度が高く、環境領域での適応度が低いという矛盾が存在している。在籍身分の場合、非正規生の方が正規生よりも、全体の適応度が高い、といった結果が分かった。

本論もまた、中国人留学生の日本への適応という問題を考察対象としている。「適応」を個人と異文化環境との調和的関係の確立として静的に捉える立場にある。また、適応尺度において、文化、中でも時間感覚という文化の違いにおける適応を取り上げる。その際に、筆者は特に中国人留学生の「手帳」の使い方に着目する。上記のことを明らかにするために、鹿児島にいる（いた）留学生及び元留学生を調査対象とした。

本論は次のような構成を取っている。第1章では、中国の留学事情および中国人の日本社会への適応における主要な障壁につて説明する。第2章において、社会学、中でもシンボリック相互作用論から見た社会化論の観点を説明する。第3章では、中国人留学生の「手帳」の使用に関する調査の結果を示し、シンボリック相互作用論の社会化論の観点からその結果を分析する。第4章では、第3章の分析を深め、その分析の結果から本論の展望と課題を考察する。